

学生大使 実施報告書

氏名：梶田菜月

学部・学科（コース）・学年：医学部・看護学科・1年生

派遣先大学：ベトナム国家農業大学

派遣期間：2週間

1 日本語教室での活動内容

派遣された山大生は全員で14人と、前回の3人とは変わって多かった。そのため、現地学生と山大生が1対2ほどの少人数のグループに分かれて、日本語教室を実施していた。日本語教室には、ベトナム国家農業大学の学生ではない小学生やその父親が参加しているなど、日本語や日本の文化が好きで学びたいと考える人たちが主体的に参加しているものであった。活動内容としては、主に、山大生が現地学生の日本語レベルに合わせてホワイトボードや紙を使い日本語を教えた。また、ベトナムのゲームや日本語当てゲームなども行った。学生たちは互いの異なる文化や遊びに強い関心がありどれも白熱しており、学生たちは互いに主体的に日本語や英語でコミュニケーションをとりながら楽しく進めていた。特に、折り紙や茶道の時間では、山大生が日本からのお茶をそれぞれ持ち寄り、緑茶やほうじ茶、中には梅昆布茶を持ち寄った人もおり、みんなで味わった。現地学生やベトナムの子供たちに日本のお茶やお茶菓子をふるまい、YouTubeを見ながら折り紙を教えた時間はとても印象に残っている。この活動から、日本の繊細で考え抜かれた文化の一端に触れ、難しがりや集中したりして取り組む学生の姿が見られた。日本語教室での交流は、あらかじめすることやテーマが決められたものなので、意識的にベトナムの学生と交流していた。その為、教室外での交流とはまた違った角度からお互いの文化や生活に触れることができた。

2 日本語教室以外での交流活動

今回の派遣では、日本語クラスがメインであると忘れてしまうほど、現地学生の皆さんが私たちをいろいろな観光地に連れて行ってってくれた。私たちの「行ってみたい。買いたい。」といった声に応えてくれ、学生大使として今回ベトナムへ行ったことで、2週間でベトナムのとてもディープなところを実際に見て、感じる事ができたと感じている。特に、日本語クラス以外の活動で印象に残っているのは、つある。

一つ目は、メガワールドに行ったことだ。メガワールドでは山大生5人と現地学生2人が1グループとなり、少人数で回った。メガワールドは、ベネチアと韓国をコンセプトにした融合施設であり、韓国の建物一帯は、完成しているものの出店は無く、空の状態が続いていた。出店の大半はベネチアをモチーフにしたカラフルな建物が建つ範囲に集中していた。カフェにコーヒーを飲みに行ったり、グループごとにプリクラを撮って思い出を残したり、お土産を買ったりと様々過ごしていた。ベトナムの市街地とは違う、観光地としての雰囲気を感じる事ができた。少し開けて人が多く集まるところに爆音で盛り上がる大きなクラブがあり、

【学生大使 実施報告書】

衝撃を受けた。

二つ目は、アオザイを着た事だ。アオザイとは伝統的なベトナムの民族衣装であり、大きくスリットが入った女性らしいデザインと、色鮮やかな生地に施されている装飾がとても美しく思え、私はアオザイを着られることをとても楽しみにしていた。アオザイをレンタルし、現地の大学で3時間ほど写真撮影をした。一人の写真や各々友達との写真、現地学生との写真、集合写真を撮っていた。アオザイは半袖や長袖のものがあるが、どれもサラサラとした薄くて涼しい素材でできており、ベトナムの厳しい暑さの夏でも快適に着ることができると感じた。

三つ目は、ホアロー刑務所に行った事だ。ベトナム戦争時にフランスがベトナム人を収容した場所であり、暗く電気のない独房やギロチン、脱走者が使った穴などそのままの形で保存されていた。翻訳機を使いながらその説明書きを読んで理解を深めていた。戦争の悲惨な実態を目の当たりにするとともに、この悲劇を二度と繰り返してはならないと強く思った。特に印象に残っているのは、硬い板の上に足枷をされてもなお、隣の同志達と会話をしている像を見たことだ。どの時代もどんな環境に置かれていても、知恵を振り絞って人々は生き抜こうとするという事を実感した。

3 参加目標への達成度と努力した内容

私の参加目標は「日本とは異なる文化や環境、人々に触れて自分をより豊かにする」「日本語教室で積極的に交流する」というものであった。どちらの目標も自分なりに精一杯達成することができたと考える。目標の達成のために努力したことは、日本語を話して間違えてしまう事を恐れている様子が見受けられ、中々話そうとはせずにはいたために、英語やベトナム語ができない私たちはコミュニケーションを取ることに苦戦した。私が、翻訳機を使ったりジェスチャーや表情を頼りにしたりして対話を続けるように努めると次第に話してくれるようになった。

4 プログラムに参加した感想

仲を深めてお互いのことを知っていくうちに、お互いの出身や育った環境に起因する価値観の違いなどを受け入れて接することができていた。国籍のフィルターをなくして友達として沢山対話を重ねたことで作り出せたものであると考えている。ベトナムの学生たちと交流を深める中で、国籍や生まれ育った環境の違いを忘れてしまうほど、違いを見つけることが難しくなり、同じなのだと感じるようになった。この感情は、日本を出なければ感じることはできなかったはずだ。しだいに海外に対して抱いていた偏見がなくなり、更に視野が広がったように感じる。

5 今回の経験を踏まえた今後の展望

今回のベトナムへの派遣は、私にとって初めての海外であり、ベトナムに来る前は海外に対して危ないところだという印象があった。しかし、ベトナムに来て日向クラブの皆さんと一緒に付いてくれ、たくさん話しをしたり、色々な場所に連れて行ってくれたりした。2週間と

【学生大使 実施報告書】

いう長くて短い期間であったが、安心して楽しく、ベトナムでのステイを過ごすことができた。学生大使というプログラムへの参加は、山形大学を志望した理由に挙げた程とても興味があり、自分自身を成長させてくれると考えていたものであった。実際に参加してみて当初期待していたもの以上にとても魅力的なプログラムであり、海外への偏見やハードルが低くなったのを実感している。私の夢である、世界の貧地で本当に医療を必要としている人たちを支援するために、看護師としてボランティア活動などに参加したいという思いが大きくなった。今回実感した課題として、英語力の無さがあるので、計画的に英語の勉強を進めていきたい。

6 現地での活動写真

写真1 メガワールドのカラフルな建物



写真2 アオザイを着て写真撮影



写真3 日本人とベトナム人とインド人



写真4 町中にごまんと止まったバイク

